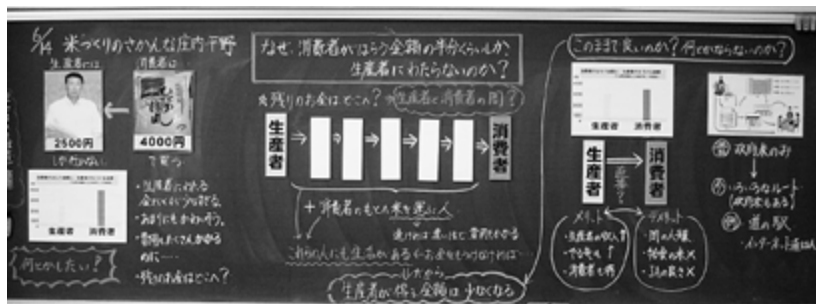


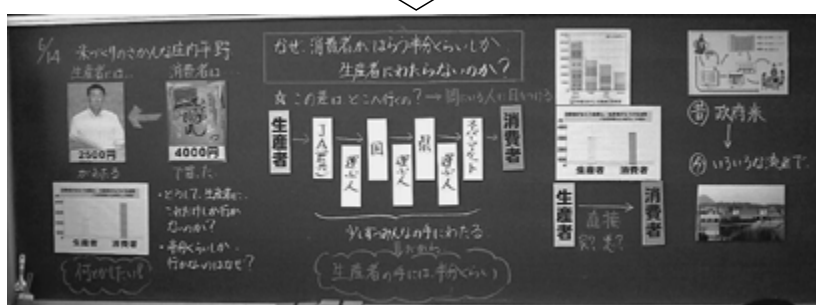
方法を示した。まず、観察者が「実感・納得」しているか否かを判断し、その判断した根拠を子どもの様相に求め、記述できるようにした。

実践前に板書計画を印刷して参会者に配布するようにした。板書計画には、集団吟味によって思考様式の有用性が「承認・合意」される過程を子どもの反応で示すようにした。実践後のリフレクションの場で、実際の板書と比較し想定との違いに論点を焦点化して、思考様式を「承認・合意」するための集団吟味の在り方を討議するようにした。

【板書計画】



【実際の板書】



【板書の比較から、集団吟味の在り方を探る】

6 思考様式分類表*1の整理

個と集団での言語活動の充実を考える際には、子どもにどのような言葉で表現させることが効果的かを考えることも重要である。たとえ的を射た意見であっても、他者が理解しにくい表現が用いられる言語活動では、「実感・納得」「承認・合意」も得られず、共有化ひいては「思考力」育成にはつながらない。このことから、学習の主体である子どもの発達段階を踏まえた言語活動を行うことが大切だと考えられる。

「思考力」育成をねらいとし、発達段階を踏まえた言語活動の必要性について、新学習指導要領には次のように示されている。

総則の「第1 教育課程編成の一般方針」では、基礎的・基本的な知識・技能や思考力、判断力、表現力等の教育課程がめざす学力を示した上で、「その際、児童の発達段階を考慮して、言語活動を充実する」こととされている。総則の冒頭に挙げられているのは、各学校で教育課程を編成する際に、言語活動の充実を計画的に位置付けなければならないという意味をもっている。

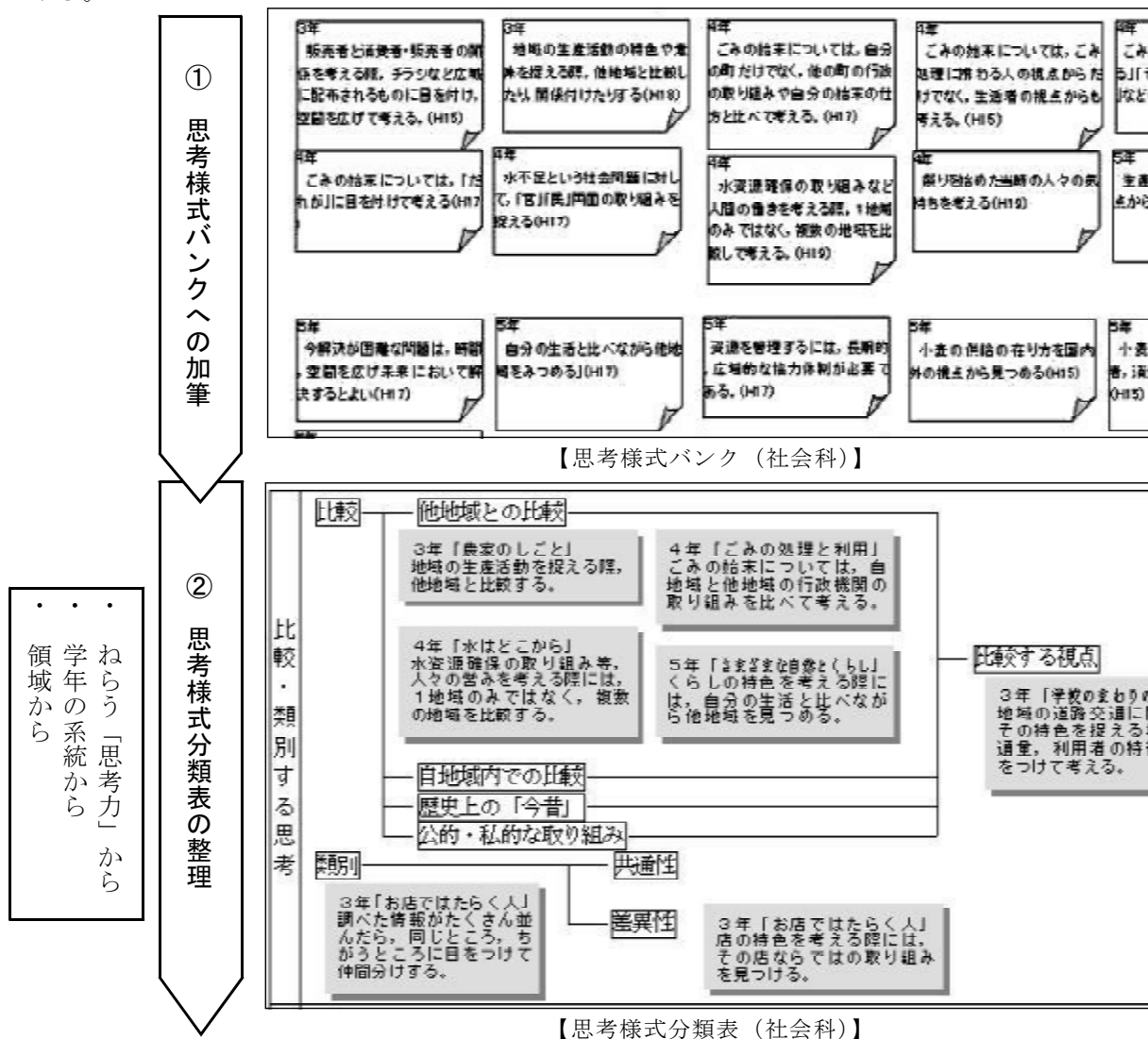
総則の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」では、「児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視」することと並んで、言語に関する学習や言語環境の整備が示されている。ここでは、各教科等の指導において、思考力等の育成や知識・技能の活用との関連で言語活動の充実が求められていることが分かる。つまり、習得した知識を用いて説明したり、表現したりといった言語活動が、知識・技能の活用場面で行われることによって、思考力等の育成に有効となることを示唆している。

では、「思考力」の育成をねらいとし、発達段階を踏まえた言語活動とは、どのようなものか。

*1 本研究紀要第三章(22頁から)に教科ごとに示している。なお、紙幅の都合上、思考様式バンクにある全ての思考様式を掲載することは難しいため、代表的なものを抽出して示している。

私たちは発達段階に応じた表現は、思考の系統と対応するべきだと考え、思考様式バンク*1の整理を試みることにした。それは、言葉と思考は密接に関連*2し合っており、子どもが考えたことを表現する言語活動は、ダイレクトに思考に働くと考えられるからである。つまり、求められる言語活動の一つとして、思考のプロセスの一部を表す思考様式を使って、自らの考えを説明する言語活動が挙げられるのではないかと考えた。すなわち、考える際に活用した思考様式を、表現する際にも何らかの手がかりとして活用させるというものである。そのためには、思考様式バンクに貯めておくだけでは、活用することは難しい。思考様式を発達段階に応じて系統立てて整理する必要がある。

このように将来的に思考様式を活用する幅を広げることを見通しながら、これまで蓄積してきた思考様式バンクの思考様式を、ねらう「思考力」や、学年の系統、領域等によってカテゴリーに分け、「思考様式分類表」として、整理することに取り組んできた。その手順は概ね次の通りである。



このように、実践を通して効果が明らかになった思考様式を、学年の系統や領域によって分

*1 私たちは、平成15年度からの8年間、「思考力」研究で実践を通して「思考力」育成に有効とされる思考様式を、思考様式バンクに蓄積してきた。実践の裏付けのある思考様式のみを教科ごとにデータとして貯め続けている。

*2 「言葉」は知的活動の基盤となるものである。子どもの理解も思考も言葉を介し、その度合いが外部に表出される。さらに言語活動は、自分の考えを整理したり振り返ったりする自己内対話としてのメタ認知の側面や、コミュニケーションのツールとして、他者との対話、集団吟味の側面をもち、思考に深く関わっている（昨年度本校研究紀要参照）。

類することを通して、各学年において、思考を経て子どもがどのような表現ができるようになっていけばよいかが、徐々に明らかになってきている。

例えば、前頁の社会科の思考様式分類表には、他地域と比較する際の思考様式が、4つ挙げられている。学年順に並べると、次のようになる。

第3学年「農家の仕事」	地域の生産活動を捉える際、他地域と比較する。
-------------	------------------------

第4学年「ごみの処理と利用」	ごみの始末については、自地域と他地域の行政機関の取り組みを比べて考える。
----------------	--------------------------------------

第4学年「水はどこから」	水資源確保の取り組み等、人々の営みを考える際には、1地域のみではなく、複数の地域を比較する。
--------------	--

第5学年「様々な自然と暮らし」	暮らしの特色を考える際には、自分の生活と比べながら他地域を見つめる。
-----------------	------------------------------------

このことから、他地域と比較する思考は、「他地域と比べる」に始まり、学年が進むにつれ、「行政機関の取り組みに目を付けて」「複数の地域と」「自分の生活と結びながら」と、観点が付加されているのが分かる。つまり、同じ「他地域と比較する」学習であっても、第3学年で「1つの他地域」と比較していたのが、第4学年では「行政の取り組み」に目を付け「複数の他地域」と比較する学習へ、さらに第5学年では「自分の生活とも関連付ける」といった系統が見えてくる。この系統から、それぞれの学年において、次のような思考を経た子どもの姿が想定できる。

第3学年では、「A地域は〇〇だけど、B地域は□□だ。」と、2つの地域で異同を表現する子ども。

第4学年では、「A地域では△△という取り組みをしている、B地域では◇◇という取り組みをしている。私の地域の取り組みの中でA地域とよく似ているところは…で、B地域と似ているところは～である。」と表現する子ども。また、複数の地域の特色から一般的なことを見出した子どもが、「どこの地域でも、取り組み方は異なるが、…という考え方は同じ。」と表現することも考えられる。

第5学年では、「A地域がこのような生活をしているのは、…という気候や地形の特色があるためだ。それは、～という気候や地形のため、私たちの地域がA地域と異なる生活をしているということと比べるとよく分かる。」と、自然条件等を基に、自地域と他地域の生活を比べて表現する子ども。

このように、それぞれの学年において、表現する際にも思考様式を活用している子どもの姿を想定することで、「思考力」の育成をねらいとし、発達段階を踏まえた言語活動が実現できるのではないかと考えている。

以上のように、現在私たちは、表現する際にも思考様式を活用できるよう実践を積み重ねながら系統をまとめている過程にある。それゆえ、全ての教科、全ての学年における系統をふまえた言語活動を実現するためには、更なる実践の蓄積が必要だと考えている。